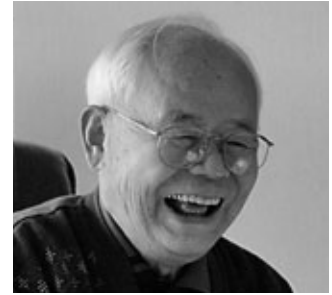


「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介しています。



高橋 努さん
昭和10年4月30日生まれ。
中音更地区在住

私の生まれと 子どもの頃の思い出

私の父は山形県東根市出身で、昭和10年3月、祖父と共に音更町の最北端にある中音更地区へ小作農として入植、定住しました。程なく私は高橋家の長男として、この地で生まれました。

小学校に入学した頃は戦時下で、あらゆる生活物資が不足していました。弁当を持って来られない子どもたちが教室から出て、ひもじい思いで友だちが食べる様子をのぞいている姿は、言葉で表わせないうつらい光景でした。授業中に貴重な学用品である鉛筆を床のすき間から落としてしまい、クモの巣の中を必死に探し出したことを思い出します。

小作農の苦勞と 農地改革

自分の土地を持たない小作農は、秋の収穫を終えると収穫高の30〜40%の小作料を地主に支払いました。残ったお金で家族を養いながら、営農を維持していく苦勞は並大抵のものではなかったと、生前によく父が話していました。生活を支えるために体力の限界までひたすら働く、そんな両親の姿が今もまぶたに焼き付いています。

昭和20年に終戦を迎え、2年後、農地改革政策により私の家もついに7町5反の農地を所有する自作農になりました。そのときの家族一同の喜びは大変なもので、生涯忘れることはありません。

土幌中学校へ通学、 高校卒業後就農

当時、中音更地区から最寄りの市街地は中土幌でしたが、中土幌へ向かう音更川の木造橋が流されていたため、家からの距離も大体同じ土幌中学校まで7キロの道のりを通学しました。

高校卒業後は農業に従事し、地域交流の場である青年団活動に積極的に参加しました。昭和36年、活動で知り合った豊田地区出身の妻と結婚、4人の子どもに恵まれました。

地域一丸となり、 学校の存続を求める

年次計画で校舎の改築や環境整備を進める中、次は東中音更小学校の番だと喜んでいたら、いつまで経っても始まりません。教育長を訪問してみると、児童数の激減など情勢が変わり、他の学校への統合も視野に入れているということでした。寝耳に水とはこのことです。すぐにPTAや地域の皆さんと集まり、話し合いが始まりました。学校の存在が地域活動の核になっているから、絶対に学校を残さなければという意見が大半を占め、学校を何とか残してほしい、小さな学校だからこそ、教育委員会や議会などに働きかけ続けました。校舎の改築や運動場整

備が実現した時は、ありがたくて、喜びに沸きました。しかし、それからわずか10年後の平成22年、東中音更小学校は閉校の道を歩むことになりました。

未来に望むこと

今春、孫の光希が大学を卒業し、就農することになりました。自分の孫に限らず子どもは宝ですから、未来を担う子どもたちとにかく十分な教育をしてあげたい、そんな思いでいっぱいです。

今の農業は、昔と違って機械投資など大きなお金が必要な時代です。でも必ず1年毎の収支バランスをとることが大事じゃないかと感じています。あとは家族や友人、みんなが健康に生きていくことができれば、それ自体が幸せなことと感謝しています。



▲孫たちが80歳の誕生日にくれた色紙